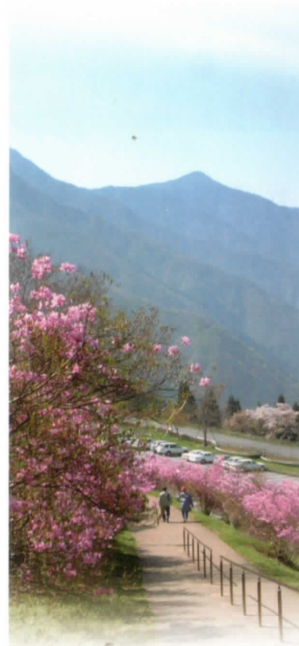




三峯神社



三峯神社

〒369-1902 埼玉県秩父市三峰298-1

TEL:0494-55-0241(代) FAX:0494-55-0328

URL <http://www.mitsuminejinja.or.jp>

三峯神社の行事

1月1日	歳旦祭・元旦祈願祭	4月7日	春分の日
1月3日	元始祭	4月8日	日本武神社祭
1月14・15日	御筒粥神事	八十八夜	例祭
1月第3・第4日曜日	豆いり神事	5月29日	風除祭
節分	節分祭(ももごとし神事)	6月3日	昭和祭
2月10日	恵美須祭	6月11日	奥宮山開祭
2月11日	紀元祭	6月12日	東照宮祭
2月20日	祈年祭	6月30日	三柱神社祭
3月20日	一社講社祭	7月1日	大蔵・道雲祭
3月20日	大山祇神社祭	7月15日	摂末社祭
		7月15日	水川神社祭
		夏の土用五日	大日祭



三峯神社由緒

当社の由緒は古く、景行天皇が、国を平和になさろうと、皇子日本武尊を東国に遣わされた折、尊は甲斐国(山梨)から上野国(群馬)を経て、碓氷峠に向かわれる途中当山に登られました。

尊は当地の山川が清く美しい様子をご覧になり、その昔伊弉諾尊・伊弉册尊が日本の国をお生みになられたこととお慰びになつて、当山にお宮を造営し二神をお祀りになり、この国が永遠に平和であることを祈られました。これが当社の創まりであります。

その後、天皇は日本武尊が巡られた東国を巡幸された時、上総国(千葉)で、当山が三山高く美しく連なることをお聴き遊ばされて「三峯山」と名付けられ、お社には「三峯宮」の称号をたまわりました。

降つて聖武天皇の時、国中に悪病が流行しました。天皇は諸国の神社に病気の



三峯神社本殿



8月7日(浜日曜日)	七夕祭	11月2日	国常立神社祭
8月8日	薬師神社祭	11月3日	明治祭
8月15日	祖霊社祭	11月20日	恵美須祭
8月25日	菅原神社祭	12月23日	新嘗祭
8月第4日曜日	諏訪神社祭(獅子舞)	12月2日	冬季大祭
旧8月15日	月読祭(十五夜)	12月12日	三柱神社祭
旧8月15日	月読祭(十五夜)	12月23日	天長祭
旧9月13日	祖霊社祭	12月31日	大蔵鎮火祭(除夜祭)
秋分の日	祖霊祭(十三夜)	毎月1日・15日	月次祭
旧9月9日	奥宮山開祭	毎月10日	御焚上祭(近宮)
旧9月17日	神嘗奉仕祭伊勢両宮祭	毎月19日	御焚上祭(遠宮)

平癒を祈られ、三峯宮には勅使として葛城連好久公が遣わされ「大明神」の神号を奉られました。

又、文武天皇の時、修験の祖役の小角が伊豆から三峯山に往来して修行したと伝えられています。この頃から当山に修験道が始まったものと思われます。

天平十七年(七四五)には、国司の奏上により月桂僧都が山主に任じられました。更に淳和天皇の時には、勅命により弘法大師が十二面観音の像を刻み、三峯宮の脇に本堂を建て、天下泰平・国家安穩を祈つてお宮の本地堂としました。

こうして徐々に佛教色を増し、神佛混淆のお社となり、神前奉仕も僧侶によることが明治維新まで続きました。

三峯山の信仰が広まった鎌倉期には、畠山重忠・新田義興等が厚く信仰し、重忠は十里四方の土地を寄進、社前の大杉は重忠奉納と伝えられています。東国武士を中心に篤い信仰をうけて隆盛を極めた当山も、後村上天皇の正平七年(三三二)新田義興・義宗等が足利氏を討つ兵を挙げ、戦い敗れて当山に身を潜めたことから、足利氏の怒りにふれて、社領を奪われ、山主も絶えて、衰えた時代が百四十年も続きました。

後柏原天皇の文亀二年(一五〇二)にいたり、修験者月観道満は当山の荒廢を嘆き、実に二十七年という長い年月をかけて全国を行脚し、復興資金を募り社殿・堂宇の再建を果たしました。

後、天文二年(一五三三)山主は京に上り聖護院の宮に伺候し、当山の様子を奏上のところ、宮家より後奈良天皇に上奏され「大権現」の称号をたまわつて、坊門

第の霊山となりました。以来、天台修験の関東総本山となり観音院高雲寺と称しました。

江戸時代になると徳川將軍家をはじめ武家の崇敬もあり、特に新田開発に力を尽くした関東郡代伊奈家の信仰は篤く、家臣の奉納した銅板絵馬は逸品といわれています。

寛文元年(一六六二)には現在の本殿が建立されました。繁栄にむかいた当山も、宝永七年(一七二〇)



銅板絵馬

山主覚雄没後、山主に恵まれず十年間も無住となり、宝物も散逸し、社殿・堂宇も破損が見られる様になりました。

やがて、享保五年(一七二〇)日光法印が山主となり復興に尽くしました。「お犬様」と呼ばれる御眷属信仰を遠い地方まで広め、社頭も整えられ今日の繁栄の基礎が出来ました。観音院七世の山主は、京都花山院家の養子となり、現在社紋として用いている「菖蒲菱」は同家の紋であります。代々の山主は社頭の繁栄につとめ、天台修験関東の総本山としての地位も高まり、やがて幕府より十万石の格式をもつて遇されるようになりました。

以来隆盛を極め信者も全国に広まり、三峯講が組織され三峯山の名は全国に知られました。その後明治二年の神佛判然令により寺院を廃して、三峯神社と号し現在に至っています。



奥宮神社
寛保元年(一七四一)
創建三峯三山の(つ妙法ヶ岳)(三三三メートル)山上に鎮座(神社より徒歩約時間を要す)

遷拜殿
妙法ヶ岳に鎮座する奥宮神社の遷拜所。秩父市をはじめ遠く日光連山が見渡せる。奥宮は正面岩峰の頂きにある。近くには森玄黄斎作の神犬像がある。

清浄の流
表参道

日本武尊銅像
昭和四十五年十月十六日に二ツ宮に建立。重さ三ト、高さ五五メートル。法元六郎氏の作である。

隨身門
元禄四年(一六九三)建立。現隨身門は寛政四年(一七九二)再建。扁額は増山雪齋の筆。昭和四十年(一九六五)春改修。平成十六年(二〇〇四)塗り替えられる。

神領民家
神領三峯の住宅を移築。昔の三峯の生活様式を伝えている。

登竜橋

本殿
寛文元年(一六六一)建立。昭和三十六年(一九六一)改修。元一間社春日造り。県指定文化財。平成十六年(二〇〇四)塗り替えられる。

拜殿
寛政十二年(一八〇〇)建立。昭和十七年(一九四二)改修。正面扁額は有栖川宮熾仁親王殿下御染筆。極彩色の彫刻で覆われている。平成十六年(二〇〇四)塗り替えられる。

洪鐘(鐘撞堂)
南部山城守重直が明暦三年(一六五七)に奉納。明治時代より時の鐘として使用。現在も朝と夕に撞かれている。

興雲閣
昭和五十八年十月三十日竣工した三百人収容できる宿泊施設。温泉三峯神の湯は日帰り入浴もできる。

えんむすびの木

御仮屋神社(遠宮)
三峯神社の御眷属(大口真神)を祀る。おいぬ様と親しみを込めて呼ばれ、諸難除火難除盗難除に靈験がある。毎月十九日に御焚上祭が行われている。(近宮十日)

小教院
元文四年(一七三九)の再建。旧本堂。明治以前は仏像が安置されていた。平成三年(一九九二)十一月改修工事を施し、喫茶室を備えた建物として蘇った。

斎館(旧社務所)
大正十一年(一九二二)十二月落成。大正天皇即位御大典記念として七年の歳月をかけて建てられた。

水舎
享保八年(一八五三)に四年の歳月をかけて江戸木場堅川講奉納により建立。八棟灯籠と同様彫刻が精巧である。

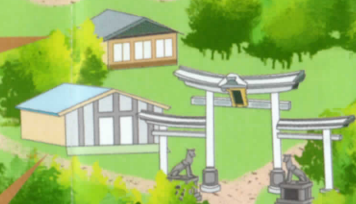
青銅鳥居
弘化二年(一八四五)に建立。江戸木場堅川講奉納により、初代塩原太助の名も刻まれている。

八棟灯籠
安政四年(一八五七)の建立。金銅右製灯籠が多いなか、大型の木灯籠は大変珍しい。彫刻が精緻巧妙である。昭和四十八年(一九七三)春修復。

秩父宮記念館
昭和三年(一九二八)六月起工し、三年後の昭和六年(一九三二)八月に完成した。宮号発祥の地に因んで建設され、昭和八年(一九三三)八月に両殿下お揃いで、六日間御仮泊なされた。

三峰山博物館
昭和五十一年(一九七六)開館。神社の宝物、秩父宮家ゆかりの品々を展示している。

重忠杉
神楽殿
額殿



秩父市営駐車場

三峰ビジターセンター

WC

奥宮・雲取山登山道

境内に咲く花々



かたくり
山上に群落が数カ所ある
四月初旬



きぶし
方言まめぶし
「豆ぶし」の花さき擁る崖下は
幾さかあらむあを潮のいろ
(鹿兒島寿蔵)
四月初旬



みつばつつじ
三峯山周辺に自生している
春を代表するつつじ
四月初旬～中旬



しやくなげ
「やくなげ」
「あやめ」と共に
三峯山の花といわれている
四月下旬～五月初旬



みやまえんれいそう
(しろばなえんれいそう)
えんれい草実となる
沼の風みどり
(小松崎爽青)
五月初旬



やまぶき
異名おもかけくさかがみくさ
ほろほろと
山吹ちるか滝の音
(松尾芭蕉)
五月初旬～中旬



くりんそう
九輪草むらがりて
霜にうちぶしし
所にて山の水すくいのみ
(土屋文明)
六月中旬



あやめ
雷雨きぬ
岨にうつふす花あやめ
(水原秋桜子)
五月下旬～六月上旬



さつざつどうだん
どうだんつつじは
三峯山に多く見られる
五月下旬～六月上旬



たまあじさい
名のごとく
蕾が大きな玉になり、
蕾のころが美しい
七月中旬



ぎんばいそう
一名「うしのつめ」といい
葉先が二つに割れている
七月中旬～下旬



つりふねそう
水たるる
岩のあひだに釣船草の
花のそよろにゆるる涼しさ
(鹿兒島寿蔵)
七月下旬～八月上旬

山上の文学碑群

三峯神社には多くの文人墨客が登拝し、二ツ宮の周辺に句碑・歌碑が建てられている。ここにそのいくつかを紹介してみよう。

○大正十五年八月、アララギ安居会に参加した歌人斎藤茂吉が山上で詠ったもの

二つ居りて 啼くこゑ聞けば 相呼ばふ
鳥がね悲し 山の月よに



この相呼ばう鳥は「佛法僧鳥」の鳴き声で、茂吉は、その時の様子

子を「野鳥」の「佛法僧鳥の思出」に載せている。この声の主は「声の佛法僧鳥」で「このはずく」である。姿の佛法僧鳥は飛ぶ時羽根に白い絞の見える鳥である。活動の時期と場所がにているための誤まりである。茂吉の碑は、昭和四十六年十月に筆蹟を移し建立された。

○山口青邨の碑は、昭和十六年四月、三峰山から太陽寺へ吟行した青邨がものした句で、やはり昭和六十一年九月自筆を移して建立された。

巫女下る お山は 霞濃くなりて

工学博士で鉦山学を専門とする青邨は、ホトトギス虚子門下の代表作家としても名高く句集「夏草」を主宰し、俳人協会顧問であった。

○時折り山上に於いて句会が催される。富安風生も、昭和四十九年四月に三峯神社を会場に「若葉社」の全国俳句大会が開かれた時、主宰として出席し次の句を作っている。

嶺々を伏せ 霧中空を 飛びけり

風生は愛知県生まれ。若い頃から高浜虚子に師事、やがて句集「若葉」を主宰して門弟を育成し、日本芸術院会員となった。碑は、昭和五十年十月に建てられた。

○朝にやあさ霧 夕にや狭きり
秩父三峰 霧の中



された。

除幕式には「神領三峯」の子供たちも招かれ、雨情作の童謡を歌って除幕式に花を添えた。その後この地に移転された。

○碑の中には氏子区域出身の俳人である井上山人の碑もある。

押しあげる 老神主や 山開

明治期社内に種月庵重水と称する俳人がいて指導したと云われ、村内に俳句をたしなむ人が多かったという。碑は岡安迷子の筆で、昭和五十三年八月の建立である。

○杉襖 なせるあたりか 時鳥

この句は、清崎敏郎が平成六年六月に三峰山に登った際の句である。本名は星野敏郎、東京生まれ。昭和十五年より富安風生に師事、同十八年には高浜虚子にも師事し、伝統俳句花鳥諷詠の道を継承。風生没後は「若葉」の主宰となる。平成十七年十一月に建立された。

○一山に こもらふきりの やうやくに 志つまりて 不可幾 天のゆふぐれ

昭和二十五年夏、三峰山に登った岡山巖の作で、筆蹟をそのまま移したものの。明治二十七年広島生まれ、医師となり、昭和五年医学博士の学位を受けた。昭和六年歌誌「歌と観照」を創刊して多くの門弟を育てた。



この歌は、歌集「遭遇」に「武州三峰山」として載っている一首である。この歌碑は、たづ子夫人の「あたかも山上からの転石の如く自然であれ」との希望により昭和五十年六月に建てられたもので、さすがに位置もふさわしく立派な碑である。

○岡山たづ子は新潟県生まれで、郷里を詠んだ歌集「雪つばき」の二首が刻まれている。

かまききの 肩につもれる雪のかさ

鳩のごとくに やさしかりにき

昭和十年、歌と観照に入社し、岡山巖に師事。同十七年岡山巖と結婚する。歌集「直心」により歌人クラブ賞受賞。夫亡き後は同会を主宰。平成八年八月三十日「歌と観照」全国大会が開催されるにあわせ、夫の歌碑の傍らに建立された。

○月光の 真木降りて来る 観月会

平成二十年十月、山上で催された観月会での句。鈴木貞雄は昭和十七年東京に生まれ、慶應大学在学中より俳句に志し、清崎敏郎に師事。師没後俳誌「若葉」三代目の主宰となる。平成二十七年十月に建立された。